グシイの葬礼

——二元的人間属性と社会的距離の分析——

松 園 万 亀 雄*

目 次

- I. 社会的距離と二元論
- II. 家屋内外の空間利用
- III. 死体処理と埋葬
 - 1. 埋葬場所と死体の姿勢
 - 2. 孫息子の役割
 - 3. 遺族と会葬者の位置
 - 4. 遺品の倒置
 - 5. 供儀
- IV. 剃髪と服喪
 - 1. 剃髪グループ
 - 2. 服喪中の規制
 - 3. 喪明け
- V. 子の葬礼と両親
 - 1. 未婚の子の葬礼
 - 2. 既婚息子の葬礼と両親
 - 3. 婚出した娘の葬礼と両親
- VI. 祖霊観の若干の側面
- VII. まとめと結論

I. 社会的距離と二元論

グシイ族の居住域はケニア南西部のキシイ・ハイランドである¹⁾。この高地は東側では白人入植者による大規模プランテーション経営の歴史をもつホワイト・ハイランドに隣接し、西側はゆるやかな斜面をなしてヴィクトリア湖北東部のケンドゥ湾に落ちこむ。キシイ・ハイランドは海拔 1500～2200 m の位置にあり、1 年間平均最低気温は 13～15℃、最高気温は 27℃ であり、年間雨量も 2,000 mm をこえ、熱帯アフリカとしてはかなり湿潤冷涼な地域にぞくする。

キシイ・ハイランドは行政的には南ニャンザ・プロヴィンスのキシイ・ディストリクトを構成

し、1969 年のセンサスではこのディストリクトの人口は 67 万余である。

グシイ族は言語の上ではバントゥ語系にぞくするが、エルゴン山からヴィクトリア湖北東岸の乾燥した低地平原をへて約 200 年前、現在のキシイハイランドに移住した結果、ケニアの他のバントゥ諸族から完全に孤立してしまった²⁾。言語文化の上で最大の近縁関係にあるクリア族は 60 km 南にあり、ロゴリとルイヤは北に 130 km、そしてキクユは東方 200 km のところに住む。グシイの隣族はすべて非バントゥ系である。すなわち北、西、南西方面はナイル系のルオ、東はパラナイル系のキブシギス、そして南東側はおなじくパラナイル系のマサイによってとりかまれている。

グシイは七つのサブトライブに分かれており、1960 年代初頭まではこのサブトライブに対応する行政区として七つのロケーションがおかれていたが、現在ではもっと細分化されている。サブトライブの名称は次のとおり。

北モギランゴ	North Mogirango
キトゥットゥ	Kitutu
ニャリバリ	Nyaribari
ワンジャレ	Wanjare
バッシ	Bassi
マジョゲ	Majoge
南モギランゴ	South Mogirango

以上のサブトライブのうち後の四つは高地の南西部に位置し、ルオ文化の影響が濃厚にみられるのにたいし、他の三つのサブトライブは相対的に正統的なグシイ文化を保持しているように思われる。

キトゥットゥとニャリバリはそれぞれサブトライ

* 横浜国立大学教育学部

ブ自身が巨大な男系クランをなしていて、外来出自が明確に認識されている寄留集団をのぞいてはサブトライブ内の通婚はできない。これにたいして他の5つのサブトライブは2以上のクランを有し、クランを異にすればサブトライブ内でも通婚できる。

私が調査したのはニャリバリであり³⁾、このサブトライブは現在、西(チャーチェ)ニャリバリおよび東(マサバ)ニャリバリ・ロケーションに行政上二分されている。本稿は主として西ニャリバリのボニャモイヨ・サブロケーション内の調査地で収集したデータにもとづいている。

今世紀初頭、英国統治下に入ってから以来、グシイでは大きな経済変動がみられた。ルオ、キプシギス相手の、そして部族内の牛をめぐる略奪闘争の拠点となっていたグシイの牛牧村(リニージの成人男子で構成されていた)が1910年代に廃止されて以来、牛は老人・女子供が従来主要な構成員であった定住村で飼われるようになり、そのことと人口急増にともなう牧地不足によって、牛牧の比重がかなり低くなった。農作物としてはかつてはシコクビエとソルガムが中心であったが、70年ほど前からトウモロコシが主要穀物となり、このほかサツマイモ、バナナ、トマト、キャベツ等が換金作物として作られるようになった。また第二次大戦後は、コーヒー、除虫菊の栽培もさかんになった。このように農業の比重は以前よりも高くなったが、ほとんどの家族が搾乳とスキ耕作のために牛を飼養しており、生業面ではグシイは農牧民といってさしつかえない。

グシイ社会のもっとも特徴的な側面は、日常生活での対人関係における厳格に規定された行動規範である。守らねばならない行動パターンは接触する人びとどうしの相対的な社会的地位によって決定される。各人の社会的地位をさだめる要因は多岐にわたるが、それらはいくつかの対になった二項対立的要素に分解することができる。そのうち重要なものは、

- (1) 男か女か
- (2) 既婚者か未婚者か

(3) 割礼がすんでいるか、まだ終わっていないか

(4) 男系親族か姻族か

(5) 隣接世代か、または互隔ないし同世代かといった二項要素である。あらゆる二者関係における行動準則は、当事者たちの属性としてのこうした二項要素の組合わせによって決定される。その結果実際にあらわれる行動パターンを観察することによって、両者間に親密な情愛の表現がゆるされ、緊張感をともなわない自由闊達な交際が認められているか、それとも逆に、さまざまな禁止事項をともなった形式ばった接触しかゆるされないか、といった意味での社会的距離を測定することができる。この「社会的距離」は、いうまでもなく、客観的な親族関係の距離とはかならずしも対応しない。

グシイには社会人類学でいう「冗談関係」と「忌避」に対応する両極的な社会関係をしめす二種類の概念がある⁴⁾。ひとつはエチエチエ(echeche)で文字どおり冗談の意味であるが、会話における冗談だけでなく、人を軽く突いたり、殴るまねをしたり、レスリングのまねごとをしたり、また留守中の人の家に入ってたべものを口にするといい、気のおけない間柄での気ままな行動一般をも意味する。もうひとつの対立的な概念はンソニ(nsoni)もしくはアマシカニ(amasikani)である。いずれも尊敬を意味するが、ンソニは性的な恥の観念をともなった尊敬であって、主として近い血族・姻族関係の文脈で使用されることが多いようだ。これにたいして、アマシカニはたとえば年長者一般への尊敬を意味したり、男女もしくは夫妻が第三者の面前でなれなれしくするのは社会一般のエチエケットに反するというので「アマシカニがない」と表現したりする。したがってアマシカニは親族中心的な状況ではなく、より広い社会中心的文脈における準則としての概念と考えてよいだろう。

上にあげた二項要素に関連していえば、(1) 同性で、(2) 婚姻上の地位(既婚か未婚か)が同じで、(3) おなじ年におなじ場所で割礼をうけ、(4) おなじリニージの成員で、しかも(5) 同世代か互

隔世代(祖父母と孫)であれば、接触する両当事者はエチェチェの関係をもつ傾向があり、この反対の属性をもっていればンソニの関係になりやすいといえる。しかし現実の人間関係では、こうしたプラスとマイナスの属性が交錯することが多いから、実際には極端な自由気ままな行動と極端な尊敬とのあいだには一連の中間的な態度が存在し、その境界がはっきりしないといった事態もおこりうる。けれどもグシイは両当事者のさまざまな属性に冗談と尊敬という二元的対立概念をひとつひとつ当てはめていき、できるだけ正確に両者間の社会的距離を定義しようと努力する。たとえば同性・同世代の者どうしは一般にエチェチェの関係にあるとみなされている。だが、割礼前の少年(オモイシア *omoisia* とよばれる)が割礼をすでに終えた先輩(オモムラ *omomura*)と会話するとき、あるいは両者が義兄弟関係にあるときは、一定の尊敬の態度が要求される。

ここで世代と社会的距離との関係について一言しておこう。同世代および互隔世代の親族は冗談関係にあり、祖父母(父方・母方双方の類別的な)と孫は親族呼称(アドレス)としては、同世代の男系親族のばあいと同様に *oyo ominto* (*my, our sibling*) とよびあう。キョウダイ、イトコにたいする態度と祖父母にたいする態度とでは相対的な年齢の差ゆえに異なる側面が出てくることはもちろんだが、しかしこの二種類の関係においては後でのべるような順守すべき行動規範が全然ないところから同一の社会的距離にあると考えてよい——それはかれらの民俗的概念とも一致する。反対に父と息子(類別的な)は⁹⁾、後者が割礼を終える9～11歳¹⁰⁾ころから尊敬の関係がはじまり、息子が結婚すればその関係はいっそう強調され、父親は息子の婚舎に入ることもできなくなる。こうした父と息子という隣接世代間の尊敬は、あるていど曾祖父と曾孫との関係にも適用される。ここで興味ぶかいのは、曾孫が曾祖父にとって父の世代の人間であるかのように扱われ、*tata moke* (*my paternal uncle*) とよばれ、逆に曾祖父が曾孫から *omwana one* (*my son*) とよばれること

だ。

このようにグシイでは、同世代・異世代をふくめてあらゆる世代関係は親族呼称と行動パターンにおいて、同世代と隣接世代という二元的カテゴリーのいずれかに翻訳されるということができる。いいかえれば、自己の世代をゼロ世代とすれば、上下偶数世代の人間はゼロ世代とみなされ、また奇数世代の者は曾祖父母(曾孫)をふくめて隣接世代とみなされる。

具体的な尊敬行動はその義務が双務的か一方的かによって、次の三種類に分類することができる。

1) 一方的尊敬行動

両当事者のうち一方だけが他方に尊敬行動を示さねばならず、他方は逆にいかなる状況においてもそうした行動を示す必要はない。たとえば同一リーニージ内の割礼前の少年は割礼のすんだ年長者にたいして完全な尊敬をはらい、侮蔑語を使用してはならない。

2) 双方的・平等尊敬行動

当事者が双互的に尊敬関係にあり、しかも双方ともに順守義務のある尊敬行動。たとえば母と既婚の息子の関係においては、親密さの表現と忌避行動は互酬的である。すなわち両者ともに相互の家屋内に立ち入ることはできるが、しかし性的なことがらを話題にすること、下半身の着衣はいうまでもなくシャツを脱ぐこと、放屁することは相互の面前では禁止され、また便所への往復をみられること、他方のイスやベッドに腰かけること等は、相互に禁止される。

3) 双方的・不平等尊敬行動

両当事者は相互に尊敬をしめす立場にあるが、特定の尊敬行動は一方にのみ義務づけられ互酬的ではない。たとえば父は妻帯した息子の家に入れないのにたいして、後者は父の家に入ることができる。また、義理の息子は義父母の家の中に入れるが、その逆は禁止されている、等々。

上述のようにグシイ社会におけるンソニ・エチェチェ複合は迷路のように複雑な対人行動の諸規

制をつくりあげているが、こうした規制はグシイ独特の価値体系にもとづいた多様な行動項目をめぐって展開される。実際に対面して相互接触をおこなう人びとは、次にあげる主要な行動項目にかんして、相互間の社会的距離をはかりながら適切な選択をしなければならない。誤って違反行為をとれば、場合によっては動物供犠をとまなう清祓儀礼の必要があり、祖霊やウィッチの意志による災難をこうむりかねないのだから、ことは重大である。

- (1) 家屋内外の空間利用
- (2) 客をむかえたときに料理すべき動物の種類
- (3) 会話でとりあげる（とりあげてはならない）話題の種類
- (4) 悪態語や侮蔑的名称の使用
- (5) 顔の表情、ジェスチャー、舌音による侮辱や不快感の表現
- (6) 抑制しない喜怒哀楽の表現
- (7) 性交、放屁、排泄など特定の生理現象に関連した行動
- (8) 握手、あいさつ、着衣など日常のエチケット

本稿では以上に概説したようなグシイ社会の重要な側面としての社会的距離の精緻な区別立てに関連して、かれらの葬礼をとりあげる。男女、既婚・未婚、親族関係、世代関係などの相違において、死者の埋葬儀礼、儀礼における遺族の役割と服喪の方法、さらには祖霊観がどのようにちがってくるかを観察するのが本稿の主要な目的であって、通過儀礼としての葬礼を象徴論的ないし意味論的に分析する意図はもたない——あるていどはこうした側面にもふれざるをえないが。

こうした目的でグシイの葬礼を観察したばあい、もっとも注意すべきものは、ここでも、さまざまな二項対立要素の重層によって決定される社会的距離と、それに正確に対応する儀礼上の差異である。グシイは多重二元論を最大限に活用することによって人間関係のスペースを設計している

のであり、葬礼における人間関係もそうしたグシイ社会の基本的特徴の一部分を構成しているにすぎない。

II. 家屋内外の空間利用

葬礼の分析に先立って、グシイにおける家屋内外の空間配置とその使用上の諸規則について略述しておくほうが、以後の記述のために好都合である。

伝統的な円形の家は、いまではほとんど消滅している。現在みる方形の家は1920～30年代から、ミッシェンの建てた教会や学校の建物の影響をうけてはやりだしたらしい。このため家屋の間取りは若干の再調整をよぎなくされたが、その基本的なルールは変わらない。

グシイの家は大部分、森におおわれた山頂と濁水の流れる山合いの谷間の中間の傾斜面に建てられている。夫妻の方形家屋には二つの部屋がある。ひとつはエーロ eero (夫の部屋) で居間としてつかわれる。他のひとつはエニョンバ enyomba (妻の部屋)⁷⁾ で、ここには炉と夫婦のベッドがある。

単婚夫妻の家では、エーロが右側にエニョンバが左側にある。ここで右、左というのは家の中に坐って下の方（つまり谷間の方向）をながめている位置からの方向である——すなわち下方から家屋に対面したときの左右の逆。グシイは部屋やドア、それに家屋周辺の空間の相対的方向をしめすとき、このように常に自分を家屋内において考える。本稿でもこのやりかたを一貫して踏襲することにする⁸⁾。

エーロには二つのドアがある。ひとつは「牛囲いへのドア」(egesieri kia bweri) であり、男子専用のドアであって、エーロの右側についている。もうひとつは「エニョンバへのドア」(egesieri kia enyomba) であって、一般に女のドアと考えられており、これは谷間に向かっている（図1参照）。

妻と女性訪問客は男のドアを使用してはならない。彼女たちは女のドアから入り、エーロを通っ

図1 男女の空間利用

てエニョンバに入る。女のドアは実際には女性専用ではなく、夫と男性訪問者も自由に使ってよいが、ただし「ソニ（尊敬）の人びと」(abanto abanson; sing. omonto omonsoni)は男のドアだけをつかう。妻の両親は娘夫婦の家屋には立ち入ることさえ禁止されているが、逆に男がその義父母を訪問するときは男のドアだけをつかう。また父とその兄弟は息子の婚舎に入れないが、しかし雌牛献呈の儀式(後述)を終えたあと、男のドアから出入りできる。

祖霊を慰撫する儀礼で犠牲動物を殺すときは、エーロ内の男のドア付近でおこなわれ、右手屋外の牛囲いの中で肉を焼く。これはすべて男子の仕事である。男たちがエーロでアマルワ（昔はシコクビエ、いまはトウモロコシで作るドロク状の酒）を飲んでいるとき、女たちもエーロによびこまれて飲ませてもらうことがある。しかしこのばあい、女の席は女のドア付近か、エニョンバとの境をなしている壁ぎわの下手の方におかれる。たいていは妻は別の小さな酒ソバをもって、仲間の女とエニョンバの中で飲む。エーロにおいた酒ソバから酒をすくってエニョンバに持ちこぶことは不作法なこととして禁止されている。

屋外空間も同様に、男の場所と女の場所に二分されている。たとえば、夕方からはじまる祖霊儀礼を外で待つとき、あるいは葬礼の甲間に訪れたとき、女たちは通常エニョンバの前に坐り、男た

ちはエーロの側や牛囲いの付近に座をしめる。このように屋外でも男は右、女は左に分かれて別べつのグループをなす。

夫が複数の妻をもつばあい、第二夫人の家は第一夫人の家とは間取りが逆になる。彼女たちの家は同じ傾斜面の上に立っているが、その中間に牛囲いがおかれる。したがって、それぞれの家の男のドアは向きあうことになり、第二夫人の家では第一夫人のそれとは反対に左にエーロ、右にエニョンバがある。

夫に4人の妻がいるばあい、第三妻の家は通常第一妻の家のま下に、そして第四妻の家は第二妻の家のま下にたてられ、それぞれの家のエーロから共通の牛囲いが見渡せるようになっている。

いずれにしても男の場所、女の場所を指し示すときグシイは通常第一夫人の家を準拠点にもちいる。だから屋内屋外ともに右側の空間は男に、左側の空間は女にぞくすると考えられている。

ホームステッド内には、このほか割礼のすんだ息子、娘たちのために別べつに独身者小屋であるエサイガ(esaiga; pl. chisaiga)が立っている。エサイガには谷間に向いたドアだけがあり、内部はたいてい寝室と居間の二つに分かれている。

III. 死体処理と埋葬

1. 埋葬場所と死体の姿勢

グシイの埋葬は伝統的には死の直後、もしくは夕方や晩に死人がでたときはその翌朝におこなわれる。しかし近年は、1～3日後に、できるだけ多くの親族が集まるのを待っておこなわれることが多い。

人が死ぬと、その性別にしたがってエーロかまたはエニョンバで火をたかねばならない。この火は埋葬の翌日の告別式が終るまで絶やしてはいけない。

夫の死体は墓穴が完成するまでエーロに安置される。夫の死体を墓穴まではこび出すときは男のドアをつかう。このとき女性親族が死体の頭と肩をもち、男たちが下半身をささえる。けれども女たちは男のドアまでくると、そこで死体から離

れ、男たちだけがドアをくぐって死体を墓穴にはこぶ。妻が死んだときは、死体はエニョンバにしばらく安置され、女たちが死体をエーロとエニョンバの境まで運んだあと、男たちが引きとって女のドアから墓穴に運ぶ。女性遺族は、墓穴に死体が下ろされ完全に土でおおわれるまでは墓地に近づいてはならない。

第一夫人が存命のうちに夫が死ねば、その死体はかならず彼女の家のエーロにまず安置され、その家の近くに埋められる。

すべての死体は頭を山頂に向け、足を下の方に向けて埋める。夫は男のドアの前にある牛囲いの中に右腕をヒジ枕にした姿勢で埋められる。妻が死んだときはその反対で、墓穴はエニョンバの前方に掘られ、死体は左腕を頭の下に折りしいた格好で埋められる。したがってグシイ流のみかたをすれば、妻の死体は墓穴で左向き、夫の死体は右向きということになる。

2. 孫息子の役割

夫が死んだとき、かれの孫息子のひとりが鉋をもって儀礼的に埋葬場所に印をつけ、その直後、穴掘りが開始される。この儀礼的刻印をおこなう孫息子としては第一夫人の長男の長男が最優先されるが、支障あるときは他の男系孫息子でもかわない。この孫息子は既婚未婚の別をとわない。かれは死者のいちばん若い妻から葬礼後、雌牛一頭をもらうことができる。この牛はオムワンド(omwando, 相続)とよばれ、この牛からうまれた仔牛は他の孫息子たちに分配される。

孫息子のもうひとつの顕著な役割は、死者の家の草ぶき屋根の頂上にある棒杭(egesuria)を取りはずすことである。これは埋葬直後におこなわれ、男系孫息子のだれでもよいが、ふつうは割礼前の少年である。この仕事にはかなりの体力が必要なので、他の大きな孫息子や、死者の兄弟がいっしょに屋根にのぼって手伝うこともある——死者の息子は決して屋根にのぼってはならない。すなわちこのばあい、死者の同世代者は孫息子を手助けできるのにたいして、隣接世代の息子はそれ

ができない。近年は孫息子の存在を無視して、死者の兄弟、イトコだけで棒杭ははずすことも時折りみうけられるようであり、比較的年齢の若い者の一部は、それがあたりまえだと思っている。ちなみに、「屋根にのぼる」行為は女子全体にとって厳しい禁忌事項であり、妻が夫以外の男と寝ることを、グシイは「屋根にのぼる」と表現する。

棒杭ははずした孫息子には、「相続」としての牛はあたえられない。死んだ夫が二人以上の妻をもっていたばあい、彼女たち全員の家の棒杭が取りはずされる。グシイにとって屋根の棒杭は「夫の旗」のようなものであって、かれの死にともなっていて取り下ろされる。妻の服喪が明けると、新しい棒杭がとりつけられ、それ以後妻は他の男を迎えられることができる⁹⁾。

男系の孫息子をもたない夫は、儀礼的な墓穴の刻印なしに埋められるが、屋根の棒杭は類別的な孫息子もしくは兄弟によってとりはずされる。

妻の死にさいしては、棒杭の取りはずしも墓穴の刻印もともにおこなわれない。

3. 遺族と会葬者の位置

長方形で深さ 3m にもおよぶ墓穴を掘りさげるのは後述の剃髪グループをのぞく男子男系親族である。墓を掘っているあいだ、近隣からやってきた会葬者は死者の家から少しはなれた前方の広場に坐っている。女はエニョンバの側、男はエーロの側、と左右に分かれる。姻族も同様に性別で左右に分かれて坐り、決して墓穴に近づいてはいけない。墓穴のそばにいてのは死者に近い男子の男系親族だけである。ここで興味ぶかいのは死者の父の行動であって、かれは時折り墓穴のそばに来て、深さをチェックして指示をあたえるが、それ以外の時は他の同世代の老人たちと一団となつて、墓穴からはなれた上手の場所にいる。

墓穴が完成し、夫の死体が中におろされると、まず死者の直系の孫のひとりが代表で土を投げ入れ、ついで妻たちが連れてこられる。彼女たちは第一夫人、第二夫人の順序で、背を墓穴に向けて四つんばいになり、両ヒジを使ってまわりの土を

墓穴に入れる。その後、男たち全員で土を入れ、穴を覆ってしまう。この作業が完全に終り、墓掘りの男たちが墓の上で手足を洗うまでは、前述の故人の妻をのぞいて女たちは墓のそばに寄ることを許されない。

妻に死にさいしては、土を投げ入れる順序は特にきまっていない。たいしては夫が最初で、他の男たちがそれにしたがう。そしてこのばあいも、女たちは墓穴が完全に覆われるのを離れた場所待っている。

4. 遺品の倒置

死者が生前よく使いならわしていたものは死の直後に、ひっくり返される。夫が死んでも妻が死んでも同様である。これらの遺品は酒ツボ、ヒョウタン、アマルワを飲むためのチューブ、椅子、コップなどをふくむ。また妻は夫が死ぬと衣服を裏返しにして着る。夫は妻の死にあたって、そうすることはない。

数十年以前まで、夫婦は木製の四本の脚、四本の横木を組み、その上に牛皮を張った一つのベッドを共用していた。そして死者が寝ていた側の二本の脚と一本の横木は、死んだ日に焼き、残りは翌朝、近くの藪に捨てていたという。いまでは、ほとんどの夫婦がエニョンパのなかに二つのベッドをもっており、死者のベッドを上下ひっくり返すだけである。喪が明けてから、これらの遺品は正常の位置にもどされる。

このような遺品の倒置は一般に「革のひっくり返し」(ogotureka chingobo)といわれる。すなわち以前、女子は腰から下を覆った革を夫の死後裏返しに身につけていた。この表現で遺品一般の倒置を代表させ、それが今も用いられているわけだ。

5. 供 儀

夫が死ぬと二段階の供儀がおこなわれる。それぞれエムルー (emuru)、オコラビア (okorabia) とよばれる。前者は遺族の「哀悼の感情」を意味し、後者は「清祓」を意味する。

エムルー供儀は埋葬の日の夕方から夜にかけておこなわれる。エムルーが始まる前に会葬者と姻

族は全員帰ってしまい、死者の家には妻(たち)と、近い男子男系親族およびその妻たちだけが残される。エムルー供儀では白いオンドリと、どんな色でもかまわない雄ヤギもしくは雄ヒツジを殺す。

白いオンドリは死者の孫または兄弟(従兄弟)が墓の上で殺し、焼く。羽毛の一部は墓の上にまき散らされ、残りの羽毛はついたままで丸焼きにする。肉はエーロの中でくう。寡婦と遺族の妻たちも家の中にいるが、グシイの伝統的な習慣では女はニワトリと鶏卵をたべなかった。したがってオンドリをたべるのは死者の兄弟、従兄弟、および孫息子である。もっとも近年はこの習慣がすたれてきて、若い女はニワトリを口にする。

つぎに雄ヤギか雄ヒツジをエーロの中の男のドア近くで殺す。この肉は男女ともに食する。

この間、エーロでの話題は自由で、なんらの制約もない。だが会話は主として寡婦の現在と将来の境遇に関するものである。死者の兄弟や従兄弟は彼女に現状を認識させ、服喪の期間が明けたら、自分たちを含めたリネージの男の中から「代りの者」(注9参照)を迎えねばならないことを力説する。男たちは意図的に会話をわいせつなものにし、性交を直接に意味する猥雑な語句をさかんに用いる。ちなみに夫婦ではない異性間で、まったく無制限なわいせつ極まりない会話がおこなわれるのは、このエムルー供儀の夜と、割礼の日の男女の歌合戦の折との二度だけである。

それだからこそ死者の息子は、このエムルー供儀に出席できない。寡婦がまだ若くて、「代りの者」を迎えることが期待されているばあいは、とくに息子の出席は厳禁である。同様に死者の父も出席できない——父は息子の存命中も雌牛献呈の儀式をおこなわないかぎり、息子たちの家屋内には立ち入りできない。

死者の父と息子にたいして要求される忌避とは対照的に、孫息子たちは自由にエムルー供儀の肉をくうことができるし、わいせつな会話の交わされるエーロのただ中に坐することもできる。

埋葬の翌朝、一般会葬者による告別式があり、

このときにオコラビア供儀がおこなわれる。リネージ内外から大勢の人びとが墓の周辺に集まる。その数は前日の埋葬のときよりずっと多い。かれらは哀悼の歌をうたい告別の辞をのべ、号泣するが、その行動は前日より抑制されている。オコラビア供儀では、白の雄ヤギをエーロの中で殺す。このとき伝統的なやりかたにしたがえば、死者の家で夜を明かした兄弟と従兄弟が内臓から腸を引出してオロベレとよばれる黒い斑点の有無をしらべる。もしオロベレがなければ、このヤギは供儀とはみなされず、通常の肉としてくわれる。そして、もう一頭の白い雄ヤギを殺してオロベレをしらべる。ところが近年は、ほとんどの人が内臓の検分をやめ、供儀の出費を一頭におさえている。この供儀は正確には「ホームステッドの清祓」(okorabia omochie)とよばれる。この雄ヤギは前日のエムルー供儀とは反対に、家の中に入ってきた親族には区別なくあたえられる。死者の父さえ、肉をもらって屋外でくうことができる。

妻が死んだときは、雌ヤギー頭が埋葬の夕方にエムルー供儀として殺される。ヤギの色はなんでもよい。若い妻のばあいは、まだ受胎能力のある雌ヤギが殺され、年老いた妻だったら出産をやめた雌ヤギをえらんで殺す。ニワトリの犠牲はないし、また埋葬の翌朝のオコラビア供儀もおこなわれない。

IV. 剃髪と服喪

1. 剃髪グループ

埋葬の翌早朝、告別式がはじまる前に、死者の男系親族とその妻たちが墓の上で剃髪する。この剃髪グループ(abanyamatati)の範囲は、死者の年齢と社会的地位によって変化するが、通常つぎの男系親族(とその妻たち)が剃髪の義務を負う。

死者の父の父

- ・ 父、父の兄弟
- ・ 兄弟、父の兄弟の息子
- ・ 息子、兄弟の息子
- ・ 息子の息子

妻が死んだときは、夫側の上記の親族が剃髪する。死んだ妻の両親も同じ日に、しかし自分の家で剃髪する。両親のいずれが死んでも、その死者の姉妹と娘は既婚未婚をとわず剃髪の義務から除外される。

剃髪しているところを姻族に見られるのは、とくに悪いこととされており、死者の姻族は午前中早い時刻には死者の家に近よらぬように心がける。

2. 服喪中の規制

夫が死んだとき妻に課せられる行動規制は、その逆のばあい——妻が死んだときの夫——よりもはるかにきびしい。寡婦は屋内にこもり、「服喪中の妻は戸外で雨に降られてはならない」。彼女はマーケットに行くこともできない。近年はこの禁を破って、近隣のホームステッドを訪問する妻もいるが、そのばあいでも屋内には招じ入れられず、握手もできないし、雨がふれば穀物倉のひさしの下にかくれる。服喪中の寡婦は、しばしば割礼後の隔離期間中の少女にたとえられる。両者とも屋内にとどまって、体を洗わず、炉の灰を頭と体にたえずふりかける。寡婦以外の遺族は、オコラビア供儀のあとは平常の生活にもどることができる。

妻が死んだとき、夫は「川をこさないかぎり」——つまり遠方に出かけないかぎり——近隣の家々を訪問できるし、他人のエーロの中でアマルワを飲んでもよい。ただしマーケットに行くのはよくない。

3. 喪明け

埋葬の2~3週間後に遺族は親族と友人を酒宴に招待するが、この日が喪明けとなる。この酒宴は死者が既婚であるときのみ開かれる。この酒宴にも死者の父と息子は参加しない。姻族も招待されない。姻族はさらに数週後、アマルワのツボをもって訪問してくる。

剃髪した人びとは喪明けの酒宴の一兩日前から死者の家でアマルワを飲みつづけているが、この日は外来の客のために世話をやく。酒宴は昼頃からはじまり、訪問客は日没前に帰る。そのあとで

寡婦は特別にとってある酒ツボを出してきて、孫息子たちにのませる。そのうちのひとりが新しい棒杭をもって屋根にのぼり、それを頂上から下に差しこむ。いまや寡婦は完全に喪から明け、「清浄な人間」(omorabu)とみなされる。

彼女が体の灰を洗い流すと、ただちに「革衣正し」(ekegorokio chingobo)がおこなわれる。彼女は今まで裏返しに着ていた衣服を正常に着、亡夫のベッド、椅子、ツボなどを元の位置に正す。寡婦は完全に自由となり、「代りの者」を迎え入れてよい。

妻が死んだときも同様に酒宴がひらかれ、倒置された遺品が正される。喪明けの儀礼は動物の供儀をとまなわない。

V. 子の葬礼と両親

1. 未婚の子の葬礼

未婚の男女はエサイガ(独身者小屋)のそばに埋められる。男の側と女の側の原則はこのぼあいにも適用される。すなわち息子の小屋も女の小屋も下向きにドアがひとつあるだけだが、息子は小屋の右側に、娘は小屋の下方に埋められる。両親ともに死んだ子の小屋に自由に出入りでき、父は葬礼の進行を宰配できる。未婚者の葬礼は、きわめてかんたんである。墓穴の刻印、屋根の棒杭のとりはずし、動物供儀、遺品の倒置、剃髪などの儀礼的イベントはいっさいおこなわれない。母親は埋葬の日も、いつものように料理してよいし、収穫期だったら翌朝、畑に出てもよい。遺族は数日後には平常のくらしにもどる。

2. 既婚息子の葬礼と両親

父は既婚の長男に雌牛一頭を献呈しないかぎり、どの既婚息子の家にも立ち入れない。父を迎える用意ができたとの連絡を長男からうけると、雌牛一頭つれていく。父はたいいていその兄弟と一緒にやってくる。息子は雄ヤギを殺して、肉とアマルワで父とオジたちを接待する。この儀礼的饗宴のあと、父とオジは息子の婚舎をいつでも訪ねることができるが、しかし入口は男のドアにかぎられ、しかも息子の妻の部屋(エニョンバ)を

のぞいてはならない。雌牛献呈は長男に子供が数人できたあとでおこなわれるとの話であるが、往時はともかく、これを実施する父・息子は現在ではほとんどみられない。そして結局、父親は息子の婚舎には足を踏み入れることなく死期を迎えるのである。

ともかく雌牛を献呈しないかぎり、父は息子の死顔をみることはできないし、たとえ献呈していたとしても、かれは息子の葬礼のすべての過程で一定の距離をたもたねばならない。父は墓掘りの間、近づかないようにしているし、墓穴に土を投げ入れることもしない。またエムルー供儀にも喪明けの酒宴にも参加しない。

父とは反対に、母は息子の存命中からその婚舎を訪ねてよい。彼女は他の女と同様、墓穴に土を投げ入れることはしないが、息子の家のエーロに入って死顔をみるし、また死体が家からはこび出されるとき、これにしがみつきの必死に離すまいとしている光景もまれではない。

3. 婚出した娘の葬礼と両親

婚出した娘が死ぬと、その両親と兄弟姉妹は埋葬の日にやってくる。兄弟姉妹は死体をみておかまわないが、両親はたいいてい死者の家から離れているか、または埋葬が終るまで娘の夫の両親の家で待つ——夫の両親と妻の両親はたがいこにコレラ(korera; *pl. chikorera*)とよびあい、なんらの禁忌もない親密な関係にある。

すべての姻族(夫にとっての)は、娘の夫のホームテッド内に宿泊することは禁止されており、エムルー供儀がはじまる前にその場をひきあげる。葬礼における姻族の出席は一般に必要なこととは考えられておらず、従前は姻族は喪の明けのを待って弔問に来たものだという。

VI. 祖霊観の若干の側面

グシイの呪術宗教的な信念と儀礼は、ウィッチクラフトと祖霊観をめぐって展開される。グシイの祖霊(ebirecha; *sing. ekerecha*)は現存の子孫のタブー違反にたいして災厄の返報をおこない、またきわめて貪欲であって不断に動物供儀を子孫

に要求する存在として考えられている。埋葬後に適切な犠牲を供しないと死者の霊は怒りだし、おそかれはやかれその家族や将来の子孫にさまざまな不幸をもたらす。たとえ葬礼において適切な供儀がおこなわれても、祖霊はそれに満足せず、二度目、三度目の供儀を要求する。それにこたえないと祖霊は、死、難病、穀物の不作、家畜の病死などの災害によって子孫を罰する。不妊、精神異常、暴力的性格、痴呆児の出産も通常、祖霊の怒りが原因とされる。

人は死の瞬間、霊となり「空中にとんでいく」。グシイの祖霊観で特徴的なのは、未婚者は死んでも祖霊にならないと一般に信じられていることだ。独身者は罪のない存在であり、「この世でなんの悪いこともしてない若者のためになぜ供儀をする必要があるのか」と人びとという。結婚こそ祖霊の悪意ある作用を活性化し、家族員に不幸をおよぼす動因なのだ。グシイの論理にしたがえば、未婚者の病氣・怪我・病死などは、かれ（彼女）が直接に祖霊の害意を誘発したのではなく、それは両親の責任なのである。したがって占い師（omoragori）のところにいき、どの特定の祖霊を慰撫し、どのような動物を犠牲にするか指示を受けとるのは両親である。未婚者は決して占い師のところに行かない。

既婚者は結婚したという事実によって死後はみずから祖霊の仲間入りをするのであり、また生存中は自己の規範外の逸脱行為を原因として自己およびその家族に祖霊からの罰を招来するのである。未婚者とは対照的に既婚者が「罪惡」（ebibe）をかかえこんだ状況にあることを、グシイは明確に自覚している。結婚にさいして罪惡を新婚家庭にもちこむのは夫婦双方ではなくて、一方的に妻だとする考え方がグシイでは一般的である。そしてこの妻が夫の家族とリネージにもちこんだ罪惡こそが、それまで眠っていた夫方の祖霊の意志をよびさまし活発にさせるのだ。このような信念は、従来敵対的な他のクランから妻をえていた男系的なグシイ社会における男系親族と姻族間の対立感情の表現だとみることも可能であろう。しかし男

女の性差が、世代差、既婚未婚の差、親族関係の差などとならんで、グシイの社会関係における行動パターンを決定する最重要な要素のひとつであり、しかもこうした諸属性の二項対立的な差異を強調することがグシイ文化のいわば統合形態（コンフィギュレーション）となっていることを考慮するならば、婚入女子が一方的に罪惡をもちこむという考えも、さほど驚くにはあたらない。この点にかんしては、グシイの女たちがこの一見男子サイドに立った見解に反駁するのではなく、むしろ男子とおなじ意見を表明していることはきわめて興味深ぶかい。

結婚すると女は夫側の祖霊のたたりをうけるようになり、実家側の祖霊は彼女にたいして作用を停止すると信じられている。結婚前に彼女が自分の村で行きだおれの死体を目にしたり、あるいは割礼後の隔離小屋で炉の火を不注意で絶やしてしまった等の経験があれば、彼女は結婚後不妊や病氣などの不幸にみまわれることがあり、このばあいヒツジを実家からつれてきて、その供儀をとまなう清祓儀礼をおこなう。だがこうした状況における妻の災難は祖霊の怒りをかったからではなく、むしろたんに彼女の遭遇した不幸な出来事や不法作の現世的な因果応報とみなされている。

グシイの祖霊観のもうひとつの特徴は、男の霊が女の霊よりも子孫にたいして強力に作用するということだ。既婚女子の生存中の罪惡性が強調されるのとは正反対に、死後の男の霊は、より強力で攻撃的だと考えられている。事実、災厄の原因をさぐり、それを除去する処法をえるために占い師を訪れる人びとの多くは、曾祖父・祖父・父のうちの特定の男子祖先にたいして供儀をおこなうように指示される。こうした直系男子祖先への供儀がひととおり終ったあともなお不幸にみまわれたグシイに、占い師ははじめて曾祖母・祖母・母のいずれかの霊を慰撫するように言い渡す。グシイの表現では「女の霊は忘れてしまったところにやってくる」。

表 1 死者の地位と葬礼

事 項	死 者			
	夫	妻	未婚息子	未婚娘
埋葬前の安置場所	エーロ(右)	エニョンバ(左)	エサイガ	エサイガ
死体を運びだすドア	男のドア(右)	女のドア(左)	エサイガ・ドア	エサイガ・ドア
墓の位置	牛囲い(右)	女のドアの前(左)	エサイガの右	エサイガの左
墓穴での死体の向き	右	左	右	左
火をたく場所	エーロ(右)	エニョンバ(左)	—	—
棒杭のとりはずし	おこなう	—	—	—
エムルーの犠牲動物	オンドリおよび雄ヤギか雄ヒツジ	雌ヤギ	—	—
オコラビアの犠牲動物	雄ヤギ	—	—	—
遺族の剃髪	おこなう	おこなう	—	—
遺品の倒置	おこなう	おこなう	—	—
死後の霊	強い	弱い	—	—

VII. まとめと結論

以上に概要をしめしたグシイの葬礼のうち、夫、妻、未婚男子、未婚女子のそれぞれが死んだばあいの儀礼上の諸手続きをかんたんに示すと表 1 のようになる。

いま表 1 を参照しながら死者の属性による儀礼上の差異の主要なものを指摘し、補足説明をくわえる。

(1) 夫婦間の葬礼の差異は、空間利用にかんするかぎり、生存中のそれと対応している。つまり男は右側の場所(エーロ、男のドア、牛囲い)、女は左側(エニョンバ、女のドア、家の前方)である。墓穴での死体の位置が男は右向き、女は左向きというのは、生きていたときの夫婦の就寝中の姿勢とは逆なのだという説を数人の老人から聞いた。しかしすでにのべたように、現在では夫婦別べつのベッドを使用し、またおそらく円形家屋から方形家屋への変化にともなってベッドの方向が 45 度まわってしまったこと(以前は山の傾斜面にたいして直角、いまは平行)などから、この正逆関係は一般には強く意識されていないようだった。

供儀の面でも夫と妻は異なる。夫にはエムルーとオコラビアの両方をおこなうのにたいして妻には前者だけである。これにかんしても興味ぶかい少数意見がグシイの老人たちのあいだにある。す

なわち昔は夫の死にともなうエムルー供儀ではオンドリのほか、雄ヤギではなく雄ヒツジだけが殺されていたし(現在ではそのいずれか)、また妻の死にさいして雌ヤギを殺すのはこの数十年の新しい現象だというのである。オコラビアでは「ホームステッドを清める」(okorabia omochie) のが目的であるのにたいして、エムルーは「ものを冷やす」(ogokendia ebinto) のがその目的だとグシイはいう。そして一般に「冷やす」ための供儀では葬礼以外では例外なくヤギではなくヒツジが使用されている。たとえば胎児が足から先に出てくる、乳児の歯が上から先にはえる、割礼手術のときに泣きだす、術後の隔離期間中に炉の聖なる火が消える、等の諸状況は異常事態であるがゆえに何らかの災厄を招来しかねない危険な“熱い”状況であり、そこでその状況をさますためにもつばらヒツジが殺される。そして多くのグシイがエムルーは「冷やす」ための供儀だと証言している以上、前記の少数意見の信ぴょう性をかんたんに否定するわけにはいかない。いずれにしても夫妻間の葬礼における儀礼的エラボレーションの差は、死後の靈魂の子孫にいたする作用力の相対的な差異と対応しているように思われる。

(2) 未婚男女間の差はそのエサイガからみて墓穴が右か左かという点をのぞいて皆無である。これは性別にかかわらず未婚者の葬礼が簡略にお

こなわれることから当然であろう。

(3) 既婚者と未婚者との葬礼上の差異は歴然としている。これは既婚未婚という二元的属性についてのグシイ独特の道徳的評価と、それに関連した祖霊観にみごとに対応しているといえよう。

遺族と会葬者の行動からは二元的属性に関連して以下のような特徴が観察される。

(4) 孫息子は祖父の死にさいして、墓穴の刻印、屋根の棒杭のとりはずしと新しい棒杭のとりつけ等の役割をはたし、死者の兄弟、従兄弟とともに埋葬後の供儀と喪明けの酒宴に参加するのにたいして、死者(既婚)の父と息子はこれらから遠ざけられている。また父と母とでは既婚息子の葬礼において後者の方が死体により近く接近することを許される。これらはすべて死者とこれらの親族との社会的距離に対応した行動であり、一方では隣接世代間の忌避関係、他方では同世代および互隔世代間の親密な関係を典型的にしめているといえる。

(5) 姻族は埋葬の日にやってきても、完全に死体が土で覆われるまでは墓に近づけないし、供儀にも喪明けの酒宴にも参加しない。そして喪明けまでは死者のホームステッドに宿泊できない。たとえ妻が死んでも彼女は夫側の親族の一員として埋葬されるのであって、彼女の両親や兄弟姉妹は姻族としての距離をたまたねばならない。しかしこのばあい、死者の同世代者(兄弟姉妹)の方が両親よりも相対的に死者への接近が許される。なお夫妻のいずれが死んでもその剃髪グループのメンバーはおなじ——すなわち夫方のリネージ成員とその妻たち——であり、妻は結婚を境に夫方の祖霊からのみ影響をうけるようになり、また離婚されて実家にもどった女が死ねば父や兄弟のホームステッドの外側に埋められる。これらのことは婚出した女が実家のリネージにとっては、いわば完全なよそものになってしまうことを意味しており、それだけに娘の死亡にさいしても両親はただ実家で剃髪するのみであり、たとえ埋葬時に出向いても完全な姻族として扱われる。逆に婚出した

娘が両親いずれかの葬礼に参加したばあいも、両親のホームステッドで夜をすごすことは許されない。グシイがいうように、両親やリネージにとって娘は生まれたときからオモゲニ(omogeni)、すなわち客人なのであって、いずれは実家を去り、アバコ(姻族)の一員として同化されてしまう。そして女は自分の男系親族の死のために剃髪するのではなく、夫とその一族の死のためにのみ剃髪するのである。

(6) 遺族、一般会葬者における男女間の差異も明確である。女子は一般に葬礼の過程全体を通じて消極的な役割をはたすのみである。妻が亡夫の墓に土を投げ入れる行為をのぞいて女子は死者の近親であっても完全に埋葬が終了するまでは墓に近づけない。たいてい屋内かエニョンバ側の戸外に一団となつてたたずんでいる。一般会葬者も墓からはなれて男女別に座をしめている。墓穴の刻印、墓掘り、土投げ、屋根の棒杭のとりはずし、犠牲動物の解体と料理(火であぶる)、その分配など顕著な仕事はすべて男子の独占である。

ところが一方、寡婦の服喪中の行動規制はよりきびしい。妻は夫の生存中、婚外性交渉をもつことを厳禁されているが、この禁忌は「性的共有」(amasangia)——すなわち夫以外の男と性関係をもつ——の状態にある妻が病気の夫や子供に近づくとかれらは死んでしまうという信仰によって支えられている。妻は亡夫の死体を埋める前に「屋根にのぼった」——他の男と寝た——ことがあるかどうかを遺族の長老に問いただされる。身の潔白を証言した女は埋め終った墓の上で両脚をのばし、足首にはめた輪(ebitinge)——7~8個の鉄の筒にバナナの繊維を通したもので既婚女子の地位をしめす——を切りはずしてもらふ。婚外性交渉の経験を告白した女は、アマニャンシとよばれる草の呪薬を呪医に処方してもらい、それを亡夫の右手にもたせて、その手から呪薬を口にふくむ。これが亡夫との和解を象徴する行為である。服喪の期間中、寡婦が屋内にとじこもり炉の灰を全身にかぶる行為は、割礼直後の隔離中の男女と同様に死から再生に移行する境界期儀礼を象徴し

ており、喪が明けて彼女の家に新しい棒杭がすえつけられ、みずからは身体の灰を洗いおとして着衣を正すことによっていわば化身を実現し、他の男と性関係をもつ権利を獲得する。

上記のように、葬礼における多様なカテゴリーの人間の諸行動と役割配置は、グシイの生活全般をおおう行動準拠枠組としての社会的距離の、死別という特定状況における一表現とみなすことができる。そしてこの社会的距離は重層的な二元的属性の複雑な組合わせの結果として決定される。人びとはさまざまな個人的、社会的属性を有しており、それらの属性にたいする解釈・評価の差異こそがグシイ文化の統合形態の核心をなしている。

注

1) グシイ (Gusii) はキシイ (Kisii) の名でも知られているが、後者はグシイの自称、アバグシイ (Abagusii) のスワヒリの変形である。したがって“グシイ”はパントゥ語の接頭辞を落とした便法的呼称といえる。

2) グシイの移住史については Ochieng' (1974) にくわしい。その要約として Ochieng' (1976) がある。

3) 私は昭和 52 年度文部省海外学術調査「東アフリカ・環ヴィクトリア湖地域のエスノヒストリー手法による総合社会調査」(代表者 一橋大学 長島信弘)の一員としてグシイの調査を担当し、同年 7 月より翌年 3 月までキシイ・ハイランドに滞在した。本稿の内容は大部分、ナイロビ大学アフリカ研究所におけるスタッフ・セミナーでの発表 (Matsuzono, 1978) にもとづいており、その概略は第 15 回日本アフリカ学会学術大会 (1978 年 5 月 27~28 日) においても口頭発表した。

4) この観点からのグシイ社会の分析は、その要点を松園 (1979) に示しておいた。

5) 母・娘の関係は父・息子の関係よりも親密であって、後者の関係におけるような厳しいルールはない。娘の結婚後、その両親は娘の夫の家屋内に立ちいることはできないが、これは両親と娘との尊敬ではなく義

理の親子関係における尊敬——このばあい強い忌避行動としてあらわれる——としてみるべきである。また息子と父、息子と母の社会的距離も本稿 III 以下でふれるように同一ではない。このように本稿でたとえば隣接世代は尊敬ないし忌避の関係にあるというとき、それは同一世代や互隔世代と対比しての相対的な傾向性を意味しているのであって、実際には両者における他の二元的属性の組合わせにおうじて尊敬の態度にも濃淡の差がでてくる。

6) かつては 17~19 歳であったが、近年は早くなった。これは英国統治下で牛牧村が廃止され部族内外の戦闘が禁止されたことが一因になっていると考えられるが、こうした文化変容の問題については別稿で検討することにした。

7) エニョンバは家屋全体も意味するし、このばあいのようにエーロ (夫の部屋) にたいする妻の部屋という意味でもつかわれる。

8) 調査開始の当初、「外部からの訪問者」としての私は、この相対的方向を全く逆に考えていたために混乱した経験がある。このように定点を家屋内におく方向認識は、グシイの内と外の空間認識とその意味づけ、ひいては夜の暗黒とウィッチクラフトへの恐怖に深く関連しているように思われる。

9) 死者の妻と性関係をもつ男はグシイ語で「代りの者」(omoteneneri) とよばれ、死者の同父同母兄弟をのぞくリニージ成員から寡婦がえらび、こうした関係から生まれた子供は死者の子として認知され、他の子供と平等の扱いをうける。

参考文献

Matsuzono, Makio 1978, *A Preliminary Description of Gusii Funerals*, Institute of African Studies Discussion Paper, No. 98, University of Nairobi.

Ochieng', W. R. 1974, *A Pre-Colonial History of the Gusii of Western Kenya from c. A.D. 1500 to 1914*, Nairobi, East African Literature Bureau.

Ochieng', W. R. 1976, *The Gusii before 1900. Kenya before 1900*, edited by B. A. Ogot, Nairobi, East Africa Publishing House.

松園万亀雄 1979, 「冗談と忌避の人類学」, 蒲生正男他編『文化人類学を学ぶ』, 有斐閣, 所収 (印刷中)。